

---

# 折れない華

クロネコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

折れない華

### 【Nコード】

N5471M

### 【作者名】

クロネコ

### 【あらすじ】

以前のお話を 大幅に変更します。

日向 蒼は、クラブ『AZAMI』の歌姫。今日も、その歌声を来店する お客様達に 聞いてもらう。  
そんな中 常連さんと一緒に来た 初来店の男性に 声をかけられた。

「もう 逃がさない」

蒼は、彼のことを知らないのに 彼は、自分のことを知っている？

## 忘れた華

「あれ……………？わたし　なんで……………こんなところにいるの？  
というより……………ここは、どこなんだろう。」

それに　こんなの　自分じゃないみたい。  
一体　どうなっているのかしら」

……………

「とにかく　このままでは、いられないわ？

絶対　お母さんだって　心配しているはずだもの。

それにしても……………おかしいな？

わたし　学校から帰って……………その後から　何にも覚えてない」

……………

「それに　この手首の傷……………いつ　出来たもの？覚えは、ないの  
に。」

何だか　怖い。知らない間に　自分が、何かをしたみたいだし。  
一体　どうなっちゃっているんだろう？」

……………

「誰も　いないよね？……………逃げるんなら　今のうちよね？  
にしても……………ここは、家なの？どつかのお屋敷なの？  
無事に　出口に辿りつけれるよね？」

……………

小鳥は、こうして 籠から抜け出し 飛びだっていった。

く？く？く？く？く？

「あおちゃーん……………こっちも、よろしくねえ」

その声に 背の低めの少女は、風のように走って そのテーブルのグラスを下げる。人々は、そんな彼女の様子を微笑ましげに見つめていた。みんな 彼女のことを知っている。だからこそ 守りたい と思ってくれているのだ。

「オーナー……………あれから 2年になるんですね？」ボーイの青年は、小さく 呟く。

その言葉に サングラスを掛けた 男は、息をついた。

「そやな？あの子も、一生懸命 頑張ってるわ。

あんな事が、あったっていうのに……………健気なもんだ。まあ 忘れてるんだけどな？」

「俺は、忘れている方が 彼女の為だと思いますよ？じゃないと笑顔でいられるはずがないんですから。あの時だって……………俺達は、何にもしてあげられなかった」

少女は、何か原因があったのか 14歳から18歳までの記憶を失っている。20歳になった 今も 何も 思い出していない。この生まれ育った 街を出る原因になった 事件のことも それ以降の足取りのことも、何も覚えていないそうだ。ただ 気がつく と 覚えのない 大きなお屋敷の一室にいたらしい。何が何だかわからず すぐに そこを出て ここへ 戻ってきたそうだ。

そんな中で 違和感が生まれ それは、大きな不安へと変わる。彼らが 駆けつけた時 少女は、酷いパニックになっていた。

「今は、見守るしか出来ない。忘れてしまっていることは、それだけ 何かがあったことになるんだから。余計なことをすれば ガラス細工のように 壊れてしまうかもしれないや」  
「そうっすね？俺も 陰で支えたいと思ってますよ」

2人の視線の先では、少女が 元気よく 走り回っている。

ここは、クラブ『AZAMI<sup>アザミ</sup>』。

昼は、カクテルの専門店として 夜は、日替わりのショーを行う店として成り立っている。スタッフの主は、女性であり お客の座る テーブルで お酒を飲みながら 接待するので 水商売とは、変わらないかもしれない。けれど 他のお店と違い ここは、無理なノルマはなかった。だから 雇われる側としては、最高の仕事場だ。内装も、近代的で 夜をイメージする エクゾチックさは、ない。逆に 女性のお客に 好まれそうな シックな空間が広がっている。営業時間は、夜の2時まで。客層は、様々で 落ち着きのある 客が、多い。

店のオーナーは、ラテン系の血を受け継ぐ 独身男性で 実は、店のホステス姐さん達に 人気がある。ただ 残念な性格をしていて その余計な行動や言動が、なければ もっと モテルのだろうが。それでも 店の話になれば 頼りになる 男性であり スタッフ全員に 慕われている。元々 違うお店のボーイをしていたらしく 人の顔と名前を覚えるのが、得意らしく 客によって ヘルプの選抜が、的確だ。だからこそ お客さんからの人気が、高いのだろう。中でも 店の自慢は、日替わりに行われる ショータイム。それを 目当てに 店を訪れる お客は、少なくない。ショーに参加する スタッフも、乗りに乗って ショーを行っているのだから。中には、昔 プロを目指していたものの 様々な理由で 断念せざる得なかった人達も、多い。

店のスタッフ達も、個性的な集まりだった。元は、男性だった N<sup>ナ</sup> O・1<sup>ネー・ワン</sup>のお色気抜群のホステス。ホストのように 女性からの支持のある 宝塚の花形のようなボーイッシュなホステス。耳は、聞こえないが 観察力がずば抜けていて 似顔絵が得意なホステス。堅



物だけど 激しいツンデレで 可愛いものに目の無い 武道派なホステス e t c。お姉系なボーイもいるし 無口だったり おしゃべりだったり ナンパなのもいるが、仕事になれば 優秀だ。

日向 蒼<sup>あおい</sup>は、この店のアルバイトだ。昼は、簡単なノンアルコールのカクテルを専門に扱い 夜は、ショーを行う スタッフとして。ただ 男性になれていない為<sup>ヘルプ</sup> 接触は、無理なので 自分のショーがない日は、各テーブルの雑用係をしている。中には、いきなり抱きついてくる客もいるが 店内の限られた 男性陣や蒼のことを知っている 常連さん達が、その魔の手から 守ってくれた。そんな彼らの元にいるからこそ 蒼は、幸せだ。

それが、いつ 壊れてしまっかなんて 思いもしなかった。ずっとこの楽しい時が、ある と思うていたのだから。

「やあ 蒼ちゃん」

見知った 声に 蒼は、嬉しそうに 振り返った。その視線の先には、笑顔を浮かべた 常連客の姿が。彼の手には、大きなデイベアがある。それを見て 彼女は、更に 目を輝かせた。

彼は、蒼が このクラブで働き始めてから 最初に指名してくれた お客さんだ。最初は、このお店に来るのを渋っていたらしいが 今では、週に何度も通ってくれる。職業は、お医者さんらしく 蒼の不調など すぐに気が付いてくれた。若いながらも 優秀なお医者さんらしい。見た目も、美形さんなので 独身時代は、相当モテたはずだ。

「藤堂さん……また 来てくれたんですね？ だけど あんまり お店に来ると 奥さんが、怒りませんか？ だって 新婚さんなんでしょう？」 蒼は、悪戯っぽく 言う。

「奥さんは、寛大だからね？ 今は、ちよつと 忙しいんだけど 時間が空いたら 一緒に来よう って 誘っているところなんだ。きつと 蒼ちゃんとも、仲良くなれるんじゃないかな？

我侂なところは、あるけど 悪い人じゃないし。一人っ子だったら しいから 君みたいな妹が、いれば 嬉しいだろうし」

藤堂さんは、そう話しながら 楽しそうだ。

初めて お店に来た時は、不機嫌で 店そのものを嫌っているようにしか 見えなかったというのに。今では、他のお客さんとも 仲が良くなっている。ただ 彼をここへ連れてきた 同僚の人達は、とても 心配そうだった。何でも 藤堂さんの奥さんは、彼らが勤務している 病院の院長先生の娘さんらしいのだから。万が一

ラブ通いが、知られてしまえば 大変なことになってしまいうらい。  
だから 蒼も、それとなく 踏み込み過ぎないように と 彼らから 忠告されている。奥さんの実家の財力なら このクラブも、簡単に 潰せてしまいうらいから。こんなにも いいお店を、簡単に 失いたくない。だから 蒼は、その忠告を守っていた。

けれど そんなある時 厄介な状況に 追い込まれることになって  
しまう。

「蒼ちゃん…… 今日、妻が 一緒に店に来たんだ。君の話をしていたら 彼女も、興味を持ってくれてね？」

蒼は、その言葉に 呆気にとられてしまう。勿論 近くのテーブルにいる 同僚達も。けれど 藤堂さんは、心から 嬉しそうに 話を続けているようだ。

どうやら 藤堂さんは、あまり 周りの空気を読むことが得意じゃないらしい。店の雰囲気、一気に 凍りついたのに 全く 気が付いていないのだから。

助けを求めるように 蒼は、オーナーに視線を向けるが 肩を竦められるだけだ。つまり 自分で 切り抜けるしかないということだろう。

目の前には、藤堂さんの奥さんが 蒼の前に座っている。誰がどう見ても 怒りを隠していることは、間違いなかった。

「どうも 初めまして……藤堂とうどう 美冬みふゆです。貴女のことは、主人から 聞いておりますわ」

そう言つて 彼女は、微笑を浮かべた。藤堂さんも、何だか 嬉しそうに ニコニコしている。けれど 蒼は、見えない 重圧に 耐えていた。なぜなら 藤堂夫人は、目が 全く 笑っていないからおそらく カウンター席に避難してしまった 常連さんや仕事仲間達も、気が付いているはずだ。この空気を察していないのは、藤堂さんだけだから。なぜ こんなにも、氷点下になろうとしている空気に 彼は、気が付かないのだろうか？

それにしても 奥さんは、美人というより 可憐な女性だ。幼さを魅力的に引き出し 立ち振る舞いも、口調も 綺麗なのだから。黒髪は、肩のところで切り揃えられていて 実物大の日本人形を連想させる。今は、白いワンピースを着ているが 紅い着物が 似合うだろう。

「どうも 初めまして。クラブ『AZAMI』のアオイです。今日は、どうぞ 愉しんでください」  
蒼は、それだけ 言うのが、精一杯だった。

「うん 愉しませてもらうよ？それに 今夜は、君の歌声を聞くことが出来るんだからね？歌が、とても 上手なんだよ。きつと 君も、気に入るはずさ」藤堂さんは、奥さんの反応に気が付かないまま 言う。

この発言に また 気温が下がる。その状態に 蒼は、思わず 小さな悲鳴を上げてしまふ。藤堂は、その様子に気が付いたらしく 不思議そうな顔だ。

「アオイ……準備だ」オーナーが、言う。

その声に 蒼は、体温が下がりすぎた 感覚の消えないまま 頷き返す。

とにかく今は、ステージに上がらなければならない。他にも蒼の歌を楽しみにしているお客さんは、いるのだから。それにもしかしたら蒼の歌を聴いて疑いを晴らしてもらえるかもしれない。そんな考えを持ちながら蒼は、シヨ一の為の衣装に着替え舞台へと向かった。

$\{ \}$

蒼は、何時も以上に はりきって 歌を奏でた。お客さんは、それを聞いて うつとり と 聞き入っている。視線を移してみると 藤堂夫妻のテーブルには、見知らぬ 顔が増えていた。

ライトで 顔までは、わからないが 男性が2人と女性が 1人の ようだ。話し込んでいる 様子から 藤堂夫妻の知り合いらしい。 蒼は、歌っている 最中 何度も 3人の中の1人である 男性と 目が合う。なぜか 彼の視線を感じると 不思議な気持ちに包まれて いるような気がしてならない。彼も 蒼を、憎んでいるかのよう に 睨み付けているのだから。

蒼は、何だか テーブルに戻るのが 怖くて仕方がなくなってしまう。なぜかは、わからないが 警告音が、鳴っている気がするのだ。けれど 無常にも ショーは、終了してしまう。

藤堂さん達のいる テーブル席に戻る途中 蒼は、オーナーに呼び止められた。

「蒼………限界がきたら 手を上げる。そしたら 理由をつけて 早退させるから」

その言葉に 蒼は、驚きを隠せない。なぜだか オーナーの目は、本気だったのだから。しかも 他のスタッフのみんなも 頷いている。蒼は、目をパチクリさせながら 首を傾げた。

「オーナーも、みんなも どうしちゃったんですか？何か あるんですか？」蒼は、何だか 不安になりながら 呟く。その言葉に 彼は、”大丈夫だ”と 言って 頭を撫でてくれる。

このオーナー こと 渚 潤みぎわ じゅんさんは、見て目こそ 悪人面あくこてんめい（ヒドイ）しているかもしれないが 何かと 面倒見が良い。なぜなら このお店で働いている ホステス達の半数は、多額の借金を背負っている者が、多く ソープなどで働いても 返せるかわからない。それを その借金を肩代わりしてまで このお店で働かせてくれるのだから。それに 蒼自身も 色々な事情があり 街を彷徨っていた時 ここでの仕事を紹介してくれたのだ。最初は、怖くて 泣きながら 街を走り回って 息切れの為 座り込んでいたのが、このクラブ『AZAMI』アザミだった。この店では、オーナーも 他のスタッフも、蒼の事を可愛がってくれる。中でも オーナーは、仕事仲間達曰く 蒼のことを、猫と間違っているらしいが。

昔を思い出している 間に セットしていた ワシワシと 髪の毛をグチャグチャにされて 蒼は、反論しようとした。けれど そ

の前に 誰かに 腕を掴まれてしまう。

驚いて 顔を上げると そこには、知らない男の人が、怖い顔を  
して オーナーを睨み付けていた。けれど オーナーは、そんな視線  
に鼻で笑う。

「見つけるのに 随分時間が掛かったな？」

オーナーは、ドヤ顔で 相手の男の人に 言い放つ。その言葉に  
彼は、苦々しい 顔をしているようだ。そんな反応を見ながら オ  
ーナーは、蒼に視線を戻した。蒼は、分けがわからず 首を傾げる  
しかない。

「オーナー……彼は、オーナーの知り合いなんですか？」

蒼の言葉に その人は、目を大きく見開く。

「このツレの兄貴が、俺の友達タチでな？ 名前は、夏目なつめ 理人りひと。ツレ  
の名前が、美河みかわ 融とあるだな？ 子供の頃から 知っている。

理人は、無口だが 執念深い 男なんだよ。しかも 色んな問題を  
抱えていて 慢性の女嫌いだったんだが 何年か前に 若い嫁さん  
をもらったのに 結局 奥さんに 逃げられちゃったらしくて……  
…それからは、大荒れで 前よりも 女に対しての態度が、悪いん  
だ」

蒼は、オーナーの言葉を聴きながら 彼を見つめる。すると 彼も、  
じっと 蒼を見つめ返す。

「奥さんを信じていた分 辛かったんですね？ だけど 世界中の女  
性が、みんな 同じなわけじゃないんですよ？ きつと 夏目さんの  
心を癒してくれる 存在が、いるはずですよ」 蒼は、ニッコリと微笑  
みながら 言う。

その言葉に 彼は、衝撃を受けたかのように 凍り付いていた。

その後 蒼は、先に 藤堂さん達のいる テーブルに戻るように オーナーに 言われた。オーナーは、夏目さんと話があるらしい。テーブル席に戻ると 藤堂さん夫妻……特に 奥さんの方は、何だか 戸惑いを隠せない顔になっていた。なぜかは、わからないが 蒼が、歌を歌っている間に 何かが あったのかもしれない。

「奥様？何だか 顔色が、悪いようですけど。大丈夫ですか？」

蒼の言葉に 藤堂夫人は、言葉なく 首を振る。

「ちよつと 遠出をして 疲れてしまったようですね？大丈夫だよ。それに 初めて こういうお店に来たからね？雰囲気は 酔ってしまっただろう」代わりに 藤堂さんが、答えてくれる。

けれど 蒼は、違和感を感じる。なぜなら 同じテーブルに就いている 男女が、先ほどから ソワソワしているようだから。もしかしたら 彼らが、夫人に 何かを言ったのかもしれない。

「蒼ちゃん……この2人のことは……」藤堂さんが、少し 言葉を濁しながら 聞いてくる。

その問いかけに 蒼は、首を振った。

「初めて お会います。この方々は、藤堂さんのお知り合いなんですよ？オーナーのお話だと ご友人の弟さんのようですけど。お名前を伺ってもよろしいですか？お連れの方は、オーナーに紹介していただいたんですけど」蒼は、全員分の飲み物を準備しながら 聞く。

蒼の自然な質問に 見知らぬ男女は、顔を見合わせる。何かの衝撃



を受けてしまっているかのようだ。それは、夏目さんの反応に少しだけ 似ているのかもしれない。

「僕は、美河<sup>みかわ</sup> 融<sup>とあ</sup>。彼女は、妻の留美<sup>るみ</sup>」

男性の方は、そう言って 自己紹介してくれた。名前を聞いて 蒼の頭の中のノートに 新たに 顔と名前がインプットされる。

美河 融 と 名乗った 彼は、人柄の良さそうな顔立ちをしており 黒淵の眼鏡をかけている。奥さんの留美さんは、少し 年下のようで どこか 儚げだ。

「美河ご夫妻ですね？初めまして 先ほど 歌わせていただいていた クラブ『AZAMI<sup>アザミ</sup>』のアオイです。よろしく お願いします」

蒼は、営業用のスマイルで ニッコリ と 微笑む。その微笑に 彼らの表情が、固まった気がする。青いが、不思議そうにしていると 後ろから 声オーナーと夏目さんが、戻ってきた。

「やあやあ……………遅くなったな？こいつが、無様に 落ち込んでいたもんだから」オーナーは、呆れたように 言う。

その言葉に 蒼は、溜息をつく。

「オーナー……………いくら 顔なじみだからって 相手は、お客様なんですよ？そうじゃないと 示しが、つかないじゃないですか。これで 変な噂が、出たら オーナーの責任なんですからね？それだけじゃなくても 最近 お店の雰囲気、壊れてきているみたいですし」

「おいおい それは、誰かさんのせいだろう？俺の責任じゃないぞ？」

「そうさせているのは、どこのどなたでしょう？」

背後から ドスの聞いた 声が聞こえてくる。振り返ってみるとそこには、しかめっ面のホステス仲間の姿が。どうやら オーナーの言葉は、しっかり 耳に届いていたらしい。釣りあがった目の端が、ピクピク と 引きつっているのだから。

「あおちゃん……………ちょっと この馬鹿に話があるから 連れて行くわね？一応 ヘルプに ミュキを置いていくから」

「はい ナナさん。けど ほどほどに。オーナーの悲鳴は、お店でも面白い催しになっていますけど 初来店のお客様もいますから」  
「ええ……………手加減するつもりだから」

オーナーは、顔を真つ青にさせて ナナさん彼女に 引き摺られるようにして 奥に連れ去られていった。

「どうも？ ヘルプのミュキです」

ミュキさんは、そう言って 満面の笑みを浮かべている。挨拶されて 藤堂さん以外の皆さんは、まだ 呆然としているようだったけれど 頭を下げている。

実は、この人……男性。といっても 去年 正式に戸籍も女性に変更した ニューハーフ。自然な体のラインをしているから 最初は、信じられなかった。けれど 昔の写真を見せてもらって 納得せざる得なかったのだ。

「皆さん アオイさんを可愛がっていらっしゃるんですね」留美さんが、何かを気にしながら 呟く。

「ええ……あおちゃんは、このクラブの歌姫ですもの。それにふわふわしていて 放っておけないの。お客さんの中には、本当の娘のように 思ってたさっている 方もいるくらいなんですよ？」

ミュキさんは、妖艶な笑みを浮かべながら 言う。  
その言葉に 蒼は、”そこまでは、大袈裟じゃありませんよ”と 苦笑する。

確かに 何かと子ども扱いされていることは、否定できないけれど 本気には、されていないはずなのだから。さすがに 等身大のボディバアをプレゼントされた時は、言葉を失ってしまったけれど。

「失礼ですが ミュキさん？ 貴女……御影 みかげ 美幸さん よしゆき じゃありませんか？ 何度か パーティで お会いしたことが、あったと思うのですが？」

藤堂夫人の問いかけに ミユキさんは、一瞬 目を見開いたようだったけれど 微笑を返す。

「あら…… お久しぶりですね 美冬さん。でも 今は、ミユキなんです。戸籍の方も、性別変更の手続きが 終わりましたし。御影とは、縁を切っております。

美冬さんも、あまり わたしの名前を出さない方が、よろしいですよ？」

夫人は、それを聞いて 黙りこんでしまう。どうやら ミユキさんは、性転換する前 資産家のご子息だったらしいのは、聞いたことはあったけど 相当な家の出のようだ。こういうことには、疎いから 知らなかったけど 話を聞いていた 他の皆さんは、呆氣に取られてしまっているようなのだから。

「それにしても 蒼ちゃん…… 歌 聞き惚れてしまったよ。最後に歌っていた 歌は、何て言うんだい？」

藤堂さんの言葉に 蒼は、嬉しくなる。だって あの歌は……。

「あの歌は、亡くなった 母が作った オリジナルなんです。わたしが、生まれる前まで 路上で ストリートライブをしていたらしくて。

わたしが 生まれてからは、よく 子守り歌代わりに 聞かせてもらいました。今日は、オーナーの許可を頂いて 1曲だけ 一番のお気に入りだった 歌を歌わせてもらったんです」

「元々 あおちゃんが、クラブの歌姫になった キツカケも、あの歌だったものね？」 ミユキさんが、思い出したように 呟く。

「ですね？ お陰で 今のわたしが、あるんですもんね？ じゃなかったら 住む場所も、お金も無くて どうなっていたか。

何がどうなっているのか 全然 わからなかったですし」

蒼の言葉に 美河夫妻は、何か 深刻そうに 顔を見合わせた。そ

して 2人は、夏目さんに 視線を送る。

「一体 どのような 状況だったんですか？」夏目さんが、どこか震える声で 聞いてきた。

「わたし……………記憶が無かったです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5471m/>

---

折れない華

2011年9月1日04時50分発行